
はぐれ星とはぐれ伝道士の記録～おまけの短編・設定集～

コメント

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

はぐれ星とはぐれ伝道士の記録〜おまけの短編・設定集〜

【Nコード】

N7003P

【作者名】

コメット

【あらすじ】

『エトワール・フィランテ〜星降りの夜の導かれし出逢い〜』や『魔法伝道士ルエノの冒険』の短編・設定などをちょこちょこ載せていく予定です。短編はいろいろと曰く付きの物があったりするので、充分にご注意下さい。

雪降る聖夜の団欒〜寒いけど暖かい一時〜【Premier volume】

いつもは優しい緑色に包まれるこの村——レインボービレッジも、いつの間にか白銀の世界となっていた。村を幻想的な色に染め上げたのは、高い空から静かに舞い降りてくる白い結晶——俗に言う雪である。そう、村に冬が訪れたのだ。

「うわぁー、すごい綺麗だね！」

初めての体験なのか、身を刺すような寒さの中で、星のような頭をしているポケモン——ジラーチのテイルは元気に飛び回っている。自分の口から吐き出す白い息も、テイルにとっては興味の的である。

「相変わらず元気だね、テイルは」

少し体を震わせながら呟くアルム。イーブイである彼にはふさふさの体毛があるのだが、この寒さの中ではそれだけでは厳しいものがあつた。

「アルムはだらしないなー。少しはテイルを見習えよな」

「毛皮もあつて、体内に炎を宿しているヴァローには言われたくないよーだ」

後ろから静かな足音を立てて近づいてくるのは、ガーディという種族上、体色からして如何にも暖かそうなヴァロー。そんなヴァローの寒さを感じていない余裕の発言に、アルムも舌を出して悔しそうにそう言い放つ。

こんな寒い中で歩いている三人。何をしているのかと言うと、元々は、先日リーブタウンのクインが訪ねてきたのがその始まりであった。

クインがその際に手土産として、一冊の分厚い本を持ってきたのである。その本に載っていた、『冬の時季に行く“ニンゲン”の行事』という項目の中に、興味を引くような面白い物が書かれていた。

名前は“クリスマス”と言い、モミの木に飾り付けを施したりプレゼントを交換するなどといった大まかな概要も書かれている。

それを見て真っ先にやりたいと言い出したのは、他でもないティルである。もちろん他のみんなも異論なく、総出で準備をする事にしたのである。

「ところで、ボク達は何処に向かっているの？」

「この未知のイベントに参加してもらえる人^{ポケモン}に会いに行くんだよ。本に書いてあった“サンタクロース”に一番近い人^{ポケモン}にね」

目的地も分からずに飛んでいるのか——とつつこみたくなるような質問をするティルに、アルムは丁寧^{ポケモン}にわかりやすく説明する。

その明確な目的地はと言うと、レインボービレッジから少し離れたところにある一軒の小屋である。ここには、冬の時季になると戻ってくるポケモンがいるらしい。

「ねー、あれかなあ？」

しばらく歩いた（飛んだ）ところで、テイルが何かを見つけて指を指す。その方角には、屋根には既に大量の雪が積もっている、木製の一軒の小さな小屋があった。周りには他の家は無く、噂の小屋に間違いないようである。

「こんにちはー。ノエルさん、いらっしやいますか？」

入り口の扉を軽くノックしながら、在宅かどうかを尋ねる。一刻経った後ではたばたと慌ただしく駆ける音が聞こえ、勢いよく扉が開いた。

「おおっ、良く来たのであるっ！ ささ、中に入るのである」

随分と陽気な態度で出迎えたのは、全身が赤と白で彩られ、赤い帽子や袋状の尾のある、まさしくサンタクロースのようなポケモン——デリバードであった。

その勢いの強さと特徴的な口調にたじたじになりながらも、三人は小屋の中に招き入れられる。尤も、たじろいでいたのはアルムとヴァローの二人であったが——。

中は広々としており、床には一面暖かそうな絨毯が敷き詰められている。ふと左側に目を遣ると、暖炉の中で元気良く火花が跳ねたり弾けたりしながら薪が燃えている。

「今お茶を入れてくるから、適当に座って待っててであーるっ」

そう言い残すと、デリバードのノエル奥の方へそそくさと歩いていった。残された三人は、言われた通りに絨毯の上に座り込む。

寒い外気温に曝さらされたせいですっかり凍えきっていた体は、暖炉が与えてくれる温気によって徐々に元の感覚を取り戻していく。座っている絨毯も、とてもふかふかして気持ち良い。このまま目を瞑れば眠りに落ちてしまう程に。

「お待ちせであーる」

うとうととして本当に寝そうになった時に、ノエルがお盆の上に紅あかみがかった飲み物の入った器を入れて戻ってきた。

それを三人の前にそれぞれ置いて、ノエルはコップに入ったそれを飲みながら目の前に座る。このお茶に対してどういう反応を示すのか気がなるのか、三人をじっと見つめ続けている。

「えっと……それじゃ、いただきます」

あまりに強い凝視でアルム達も気づいたらしく、紅みがかったお茶にそっと口をつけて舐めてみる。

「あっ……美味しい。こんなの飲んだ事ない……」

感想を求められた訳ではないが、自然と口から言葉が出て来たアルム。今まで味わった事のないものに、不思議そうな顔をしている。

「美味しいであるか？ 実はこれは木の実ではなく、葉っぱから作られた物なのである。と言っても、私は貰ってきただけで詳しくは知らないのであるが。どうやって手に入れたか聞きたいであるか？」

「えっと……」

「聞きたい聞きたい！」

矢継ぎ早に話していくノエルに対応が追いつかないままに戸惑っているアルムの横から、ティルがまだ見知らぬ事に興味を抱きながら答える。そこから、ノエルのこのお茶に纏^{まっ}わる長い話が始まるのであった――。

アルム達がノエルに会いに行っている一方で、アルムの家では一家総出で着々と会場の準備が行われていた。クインの他に、エネコのシャトン、ニューラのガート、ラフレシアのラックも集まっていた。

「それにしても悪いですねえ。アタシの家でやってもよかったんだけど」

「いえいえ、人数が多くて賑やかなのは好きですから、全然結構ですよ」

「お誘い頂いた方には、お手伝いの方頑張ります。では私も始めますね」

クイン、エーフィ、ラックの三人はキッチンに立ってそう順に話す。クインの持って来た本を参考に料理をする事になったのである。三人がそれぞれ上手く役割を分担して、自分たちの得意分野である料理を始めていく。

「うーん。これはこの辺かしら？」

「いや、もうちょっと右の方が良いんじゃないか？」

シャワーズのリアスとブラッキーのルーンの兄妹は、家の中に置かれた針葉樹に飾り付けを施していた。リングに杖の形をした飴、蝋燭やリボン、綿と様々である。

本によると、“クリスマスツリー”と呼ばれる物で、知恵の樹の象徴であるらしい。大きい体のクインがその木を運び込んだのである。

「それじゃ……この辺？」

「ああ。それくらいでバランスが取れるだろう」

ルーンが下から見て指示しながら、台の上に乗ってるリアスが器用に飾りを付けているといった形である。とは言え、四足歩行のポケモンには少々厳しいものがある。

「すごいでし！ 飾りが綺麗でしね！」

ツリーの真下では、その飾り付けに魅入っているシャトンが楽しそうに跳びはねている。ガートはその様子を部屋の片隅で静かに見つめている。

「なあ、ガート。少し手を貸してくれないか？ オレ達だけじゃ無理なところもあるから……」

「断る。俺はそんな下らない事に手伝うつもりはない」

ルーンの要望をあっさり和一蹴するガート。今この場にいる中では唯一手が使えるメンバーである為手伝ってくれても良さそうなものであるが、やはりガートは一筋縄ではいかないらしい。

「ふーん、そうか。シャトンは飾り付けが完成するのを楽しみにしてるようだけどな……」

ニヤリと意地悪っぽく笑いながら、ルーンはそう言葉を繰り返す。ガートもそれを聞いてシャトンの方を一瞥すると、あどけない笑顔を見せながら何かを訴えるような眼差しを向けていた。

「くっ……わかったよ。手伝ってやるけど、あくまでシャトンの為だからな。そこをちゃんと覚えておけよ」

捻くれた事を言いながらも、ルーンから飾りを受け取ると、ガートは素早い身のこなしで済ませていく。その姿を見ながら、シャトンとリアスがそれぞれ別の思いを含んだ笑みを浮かべていた事はまた別の話である。

「それにしても、ノエルさん呼びに行った主達……随分と帰りが

遅いです。早くしないと暗くなってしまうのに……」

「大丈夫だ。アルムやヴァローくん達なら心配する必要ないだろう」

雪が降り頻る外を眺めながら、サンダースとポリゴンのレイルは玄関で帰りを待つのであった。

「――がこうなってな、それでようやく持ち帰る事が出来たのである」

家では順調に準備が進んでいた頃、アルム達はお茶を手に入れるまでの長い話を聞き続けていた。

冬ということでもまだ夕方なのに、外も徐々に暗くなり始めていた。優雅に舞い散る粉雪の白と空間を覆い始めた影の黒のコントラストは、見ていて綺麗ではあったが、用件があるアルム達にとってはそれどころではない。

「あの……ノエルさん。実は折り入ってお願いがあるんですけど……」

なるべく機嫌を損ねないように、話が一段階したところでアルムが切り出す。

「ん？ 何であるか？」

「実は僕達、“クリスマス”っていう“ニンゲン”の行事をしてみようって事になって……それで……」

「ノエルさんに参加してもらえないかと思って、今日は来たんです」

何故か最後の方を中々言い出さないアルムの代わりに、その態度に業を煮やしていたヴァローが言いきった。

「良いである。して、それは何処でやってるのであるか？」

「僕の家です。来て下さいますか？」

「私で良いのなら……悦んでである！ では、ちょっと待ってるであゝる」

ニコツと笑顔を見せると、部屋の隅にある一つの袋と赤い帽子、そして赤い服のところまで駆けていくノエル。その一式はノエルの格好と全く同一のものである。

「ノエルさん、それは……？」

「これであるか？ これは、自分と似たような物がある場所にあつたから貰ってきたのである。プレゼントを配る為の道具らしいであるが……」

顎の部分に手を当てながら、ノエルは過去を思い返すように呟く。それと同時に、一式を見て話を聞き終えたテイルが近づいていく。

「ねー、これを着ても良いかな？」

「うむ、別に構わないであるが……」

「ほんとに！　ありがとうっ！」

持ち主であるノエルの了承を得て満面の笑みを浮かべながら、テイルはその一式を身に纏い始める。着終えた頃には、テイルも本にあったサンタクロースそのものになっていた。

「この袋に入ってるプレゼントを配るのー？」

「うん、そうであるが、しかしそれは――」

「じゃあ、ボク配ってくるね！　プレゼント配り〜」

サンタクロースの格好になってすっかり気分も乗ってきたのか、突拍子もない事を言い出したテイル。ノエルが何かを言い終える前に、何を思ったか、小屋を飛び出して行ってしまった。

「ちよっ――テイル！？　待ってよ！」

「これが悪戯の部類に入るかどうかはさておき、とにかく追いかけないとな」

突然の行動に慌てるアルムと、あくまで冷静なヴァロー。二人は後を追うに急いで外に出ていった。うっすらと雲の合間から差し込む日光によって、ちらつく雪がキラキラと光り輝いている、何処か神秘さも漂わせる空間へと――。

赤と白のサンタクロースの衣装に身を包んだティルは、体に当たってはすぐに溶ける雪の感覚を楽しみながら、レインボービレッジの方へと一直線に飛んでいた。羽衣を必要以上に大きく広げているのは、雪が気に入っているのがあるのかもしれない。

そんな自由奔放な行動を始めたティルの後を追うアルム、ヴァロ、そしてノエルの三人。ティルの飛行速度が速いせいか、走っているアルムとヴァローの白い吐息は、断続的に発せられて僅かにその水分が凍り付き、通り過ぎた後方で棚引いて残っている。

「この方向だと間違いなくレインボービレッジに辿り着くけど……どうするつもりなのかな？」

少し息を切らして走りながら、アルムは疑問に思った事を率直に口に出す。

「プレゼント配るって言ってたから、やっぱりそうするんじゃないか？ それよりノエルさん、あの袋の中には何が入ってるんですか？」

「あれには、私の“プレゼント”という技用の物が入っているのだから。もちろんただの“プレゼント”ではないであるよ」

自分の荷物を持って行かれた事に対してはさして何も思っていないようで、あっけらかんとしてノエルは答える。

しかし、“プレゼント”と言えば攻撃技。そんなものを配ったら

——そう考えると焦らずにはいらなかった。それ以前に、そこまで落ち着き払っているノエルが二人には理解出来なかったが、今はそれどころではないので何も言わない事にする。

黙って走り続けるのは体力を減らさない為にも良い事なのだが、さすがにひたすらに走るだけというのは辛いものがあつた。聞こえる音も、飛んでいるノエルを除く二人の呼吸の音と新雪を踏み締める音だけであつた。

「……二人とも、あんな離れたところに住んでいる、しかも冬の時期にしか戻ってこないような私が不気味だとは思わなかったのであるか？」

無言の状態が暫し続いて、ただテイルを追いかけて走るだけの単調な行動に疲れ始めた頃、ノエルが突然そう聞いてきた。

「別にそんな関係ないですよ？ それに、お誘いしてる時点でそんな事を思ってるはずないですよ」

心の底からの純粋な気持ちを、優しい笑顔を見せながら言葉にして伝えるアルム。隣で並んで走ってるヴァローも全く同意らしく、大きく首を縦に振って頷く。

「そうであるか……それはよかったのである——っと。話をしてる間にどうやら村に辿り着いたであるな」

顔をやや上にいるノエルに向けて話していた二人は、その言葉で前に向き直る。確かに、いつの間にか村の入り口まで戻ってきていた。

「はあ、疲れた……。ティルは飛んでるから疲れてないだろうけど……」

「そんな事言っていないで、早く後を追わないと」

一息吐いて一旦休憩を取ろうとするアルムを、ヴァローは急かすように後ろから背中を押す。やれやれ、と一言発して再び歩き出そうとしたその時。森の方から爆発音と叫び声が聞こえてきた。

「あれはやっぱり……」

“プレゼント”を配っているティルの仕業だな」

ノエルの先程の説明と今の音で、その犯人が推測ではなく確信になって、横目で互いの顔を見て頷く二人。まだところどころ緑が残ってはいるものの、全体が白く雪化粧している森の中へと走り出すのであった。

村の外も綺麗であったが、森の中はまた違って綺麗だとアルムは思った。

辺り一面の地に粉状の雪が積もっていて、すぐに溶けて消えてしまふ絨毯の上を歩く感覚も好きであったが、いつも見慣れた緑色の大木が違う色の衣装を纏っているのも見えて楽しかったのである。

まるで誰かが大きな篩ふるいを使って、世界というお菓子全体に粉砂糖

を掛けたような、雪で白く染められた景色に一時うつとりするアルム。

しかし、それは一人のポケモンを見つける事で一気に現実引き戻される事になる。そのポケモンの種族名はナゾノクサで、腰を抜かして地面に座り込んでいる。

「ナゾノクサ、大丈夫か？」

「うん。何か空から突然落ちてきた葉っぱの包みが、小さく爆発してびっくりしたただけだから……」

様子を見る限り怪我は何処にもないようで、二人は安堵の表情を浮かべる。その傍らでは、ノエルが静かに笑いを堪えている。

「あの……ノエルさん、どうしたんですか？」

「ぐふふ……実は、ただびっくりさせる為の物なのであるっ。攻撃用の物などではないのであるよ」

ノエルの異常な笑い様に怖ず怖ずと問い掛けてみると、すごくにやけた——悪戯が上手くいった時に子供が見せるような顔でそう答えた。

「そうだったんですか！？ 焦って損した……」

「いや、攻撃技であろうが無かろうが、ティルの暴走は止めないといけないだろ。また被害者が出る前に」

「そうだね。ところで、ボーソーをしてるのって誰？」

アルム、ヴァローの順にそれぞれ反応を示した後で、ふと三人のものではない声が背後から聞こえてきた。後ろを振り返ると、まさにその犯人であるティルが、いつもの無邪気な笑顔で見つめていた。

「あ……ティル！ おとなしくしてっ！」

「あははっ、追いかけてこするんだね？ 捕まらないよう！」

ここぞとばかりに飛び掛かって取り押さえるようとするアルムを、ティルは軽い身のこなしでかわす。そのまま体を翻すと、今度はアルムの家の方へと飛んでいった。

「もう……こうなったら絶対に捕まえるっ！」

「いや、そんなむきにならなくても——」

「ふむ、面白そうであるな。私も参加するであーる」

アルムを宥めようとするヴァローの言葉を遮ってノエルは陽気に、そして呑気にそう言い出すと、後を追いつめるのであった。

小型の台風——いや、ティルが近づいているとも知らないルーン達。準備も一部を残してほとんどを終えて一息吐いていた。

「アルム、遅いな……。やっぱりオレが様子を見てくる」

「兄さん、アルムなら心配いらないって。ほんとに過保護なんだから」

家の外に出て寒さに耐えながらアルムの帰りを待つルーン。相当心配なのだろうか、ずっとそわそわしている。リアスが何度中に入るように言っても、全く聞かないのである。

すっかり暗くなってしまった空を眺めながらアルムの事を心配している、突然、しかも連続して爆発音が聞こえてきた。それは徐々に近づいてくるように大きくなっていく。

その音のする方に目を凝らして見てみると、全体的に赤と白が見え、一部だけ黄色い何かがルーン達目掛けて飛んでくるのが見える。

見慣れない姿だった為に最初はそれが何か全然わからなかったが、家の手前まで来たところでようやくルーン達も、その正体がテイルである事がわかった。

「はい、これプレゼントだよ」

家まで辿り着いたテイルは、ルーンの前にも包みを落とすと、そのまま元気良く家の中に飛び込んでいった。

「ん？ 何だ、これは――」 「ルーン兄さん！ それから離れて！」

謎の物体に触れてみようとした瞬間、ようやく追いついてきたアルムの叫び声が響く。それを聞くと、ルーンは後ろ向きに飛び上がってその場から離れる。

その後、アルム達がすぐさま到着すると同時に、包みは大きな音を立てながら小規模な爆発を起こした。

「アルム、これは一体何なんだ？」

「その“プレゼント”を、ティルが村の皆に撒いていつてるんだ。詳しい説明は後にして、今はとにかく、ティルを、捕まえないと」

息を切らしながら駆け寄って説明をし終わると、アルムはその足で家の中に入ってしまった。

「ティルー、どこにいるの？」

家の中に入ったのは間違いない為、もう逃げられないはず。そう思っ
て呼びながら部屋を一つ一つ覗いていったが、全然見つからなかった。

「目立つ格好をしているから、絶対に見つかるはずなのに……あれ？」

隅々まで覗きながらそう呟いてひたすら捜していると、ティルが着ていたサンタクロースの衣装が途中で脱ぎ捨てられていた。これで目立つ格好ではなくなったという事である。

「何処にいるんだろう……。家の中にいるのは間違いないはずなのに……」

追いかけてここに続いて隠れん坊になり、いい加減疲れてきてほっ
といてもいいかと思った、その矢先の事であった。

「アルム、ここにいたのか。ようやくテイルを見つけたぞ」

ヴァローが何故かニヤニヤ笑いながらアルムにそう告げる。その笑みが良くわからずに首を傾げるアルムだったが、とりあえずヴァローの後を付いていく。

ヴァローが足を止めたのは、高々とツリーが立っているリビングであった。他の皆もここに集まって、ツリーの上の方を凝視している。

みんなの視線を辿るように視線を上げていくと、本来は星の飾りが付いているはずのツリーのてっぺんに、星頭のテイルがちょこんと乗っていた。それを見ているみんなもくすくすと笑っている。あまりにも違和感がないからである。

「あー、テイル見つけた！」

「これは追いかけてこだよ！ アルムはここまで来れないから捕まらないもん！」

「そう……じゃあもうパーティーを始めるけど、ずっとそこにいる？」

もはやテイルの世話はお手の物といったように、悪戯っぽくアルムは問い掛ける。

「うー、それはいや！ ボクも一緒に楽しい事するもん！」

遂に根負けしたらしく、テイルはおとなしく下へと降りてきて、そのままパーティーを始めるのであった。

クイン達が作った料理はどれも美味しく、特に本のレシピを真似して作った“ケーキ”はみんなに大好評だった。村のミルタンクにミルクを分けてもらい、生地部分はラックの木の实のお菓子で代用したらしい。

料理を食べ終えた後は、まだ知らない互いの事について語り合った。まるで親戚一同が集まったように暖かくて落ち着ける雰囲気であった。

パーティーが終わったのは真夜中近くだったので、来客であるクイン達は空き部屋に泊まっていく事になった。ヴァローも家は近いものの、そのまま一緒にいようという事で、ティルと一緒にアルムの部屋で寝る事にした。

「ねえ、ティル。クリスマスの日には良い子のところにサンタさんがやって来て、欲しい物をくれるらしいんだ。もしティルが何か貰えるとしたら、何が欲しい？」

部屋を真っ暗にして、草の毛布の中に三人仲良く入った状態でアルムが聞いた。

「うーんとね、ボクは欲しいものは無いかな？　だって、もうボクにはアルムやヴァロー達、大事な“ともだち”がいるもん！」

無邪気で屈託ない笑顔を浮かべながら、ティルはアルムの質問に答えた。その返答に他の二人は少し顔を赤らめて恥ずかしそうにする。

「アルムは何か欲しい物はあるのー？」

「ええっ……うん。僕は……何か友情の証みたいなのが欲しいなって。もちろん関係を疑う訳じゃないけど、互いの関係を確認し合うのに、ね。そういう相手が今まで出来なかったから……。じゃあ僕のは終わりにして、次はヴァローのを聞きたいな」

さっきまで楽しかったはずなのに、何処か淋しそうな表情をしながらアルムは言い終えると、次はヴァローに振った。

「まあ、俺のは別に聞くまでもないから、早く寝よう。おやすみ」

話すのが恥ずかしいのか、ちゃんと答えないままヴァローは眠りについてしまう。問い詰めたい気もしたが、今日は予想以上に疲れたので、二人もそのまま眠る事にするのだった――。

アルムの家にいたほぼ全員が眠りについた頃、一人だけ眠っていないポケモンがいた。そのポケモンは、何かを待っているようにアルムの家の屋根の上に立ち続けている。

そして数分足らずで、その待っていたものは突如やって来た。空から静かに降りてきたのは、全身がほぼ黄と黒の体毛で覆われている鼠のようなポケモンで、その右脇には本が抱えられている。

「時間です。ノエルさん、滞在は楽しめましたか？」

「うむ。いつもはこの日にプレゼントとともに夢を届ける立場である私が、今日初めて何かを貰ったである。夢を持つ者達の活気と優

しさを……」

その突然の訪問者に問い掛けに、ノエルはしみじみと思い出すように答えた。その顔には僅かに笑みを見せながら。

「それにしても悪いであるな。色んな世界を巡るのを手伝ってもらって」

「いえいえ、それもまた“伝道士”の仕事ですから……」

ノエルの労いの言葉に対し、そのポケモンは小さく首を振って答えながら本を屋根の上に置いて、次々とページを捲っていく。

「あ、ちょっと待つて欲しいである。様子を見たい子達がいるのである」

「いいですよ。まだこちら時間も掛かりますし」

そのポケモンの了承を得て、ノエルは小さな翼を羽ばたかせながら、ある部屋の窓の前に舞い降りる。

「ふふ……それは今日私をもてなして楽しませてくれた、ほんのお礼であるよ。少し使い方は違うかもしれないであるが」

ノエルがそっと覗いたその先には、すやすやと静かに眠るアルム、ティル、ヴァローの三人が。その三人の両手と前足はそれぞれ、円を描くようにしてリボンで優しく繋がれていた。淡いオレンジ色をした、“ともだちリボン”に――。

「君達の欲しいものをそれぞれプレゼントしたのであるよ。ずっと

仲良しでいられるように願いを込めたものを……」

名残惜しそうに背を向けると、ノエルは飛び立って再び屋根の上に降り立った。

待っていたそのポケモンの横には、何やら蒼白い楕円型のものが出現している。

「準備は出来ました。それでは参りましょうか」

「うむ。一旦またことはお別れであるな。今度来る時はもっと楽しみにしてるであるよ……」

本を抱えたポケモン——ピカチュウの後に続いてその楕円型のものに迷う事なく入っていくノエルは、最後にそう言い残すと、次の瞬間には楕円型のものごと姿を消したのであった——。

雪降る聖夜の団欒〜寒いけど暖かい一時〜【Deuxieme partie】

クリスマスの話だと言うのに、後半の更新が26日になってしまふとはとんでもない失態です。いや、お恥ずかしい。

という訳で既に過ぎてしまいましたが、エトワールの世界でクリスマスを表現してみました。最後の部分に至ってはぐだぐだになりますが、短編という事でお許し下さい。

何を描きたかったのか良くわからないものになってしまいましたが、もし楽しんで頂けたのなら幸いです。

さて、次にサンタクロースがやって来るとしたら、あなたの元に来るのはノエルでしょうか。はたまたテイルサンタでしょうか。テイルサンタの場合は即刻追いつ返す事をオススメしますw 近づいたら最後、懷かれて遊び相手にさせられるのがオチですから↑

アルム「本当にもう懲り懲りだからね……」

テイル「え〜？ ボクは楽しかったのにな〜♪」

その無邪気さで皆さんもどうか許してやって下さいね？

最後にエトワールの者ではない何者かが現れましたが、わかる方にはわかっているでしょうw これ以上は何も言いませんが。

それではもう過ぎてしまいましたが、その過ぎた時間が楽しかった事を祈りまして……。

アルム・テイル

「メリークリスマス！」

それでは僕からはフランス語で。ジョワイユー・ノエル！

これを読んで下さった読者の皆さん、本当にありがとうございます！

節分の豆まき合戦ゝ鬼が出るか蛇が出るかゝ【前編】（前書き）

とつくに節分が過ぎてますが、その辺は軽く無視して頂くと幸いですw

気ままに楽しく書いたので、描写などは二の次です。故に描写も場面
面の移り変わりも疎かになってますが、ご容赦下さいませっ。

最後に一つ。読んで「何これ？」と思うところも出て来るかもしれ
ませんが、後に纏めて説明させて頂きます。それでは、禁断の混
沌^{オス}世界へ皆さんを誘いましょう↑

節分の豆まき合戦ゝ鬼が出るか蛇が出るかゝ【前編】

雨とは違い、中に空気を含んでゆつくりと舞い落ちてくる事で白く見える結晶――雪。自らの温度よりも高い物に触れると儚く消えてしまうそれも、冷たい地面の上ではほっと落ち着ける。しかし、一旦落ち着いてしまえば、“塵も積もれば山となる”と言わんばかりに、その本性を現す。その結果として、レインボービレッジは、雪という名の白い悪魔によって埋め尽くされてしまった。

「ゆうきやこんこん あれれやこんこ はってもふってもまだへりやまぬゝ♪」

一面に広がる白いふわふわの雪のベッドの上で跳びはねながら、意味不明な歌を声高らかに歌っているテイル。以前とはまた違った光景に、胸躍っているようである。因みにこの歌、クインが持ってきた本に載っていたらしい。

「ヴァローは喜び庭駆け回り シャトン^{こたつ}は炬燵で丸くなるゝ♪」

「俺は喜んでねえって……」

陽気な歌に対して、何故か歌の中で歌われたヴァローが背後から静かに呟く。自分の背丈よりも積もっている深い雪の中を、まるでトンネルを掘り進むように歩いている辺り、駆け回れる余裕など全くない事がわかる。

「テイルもああ歌ってる事だし、たまにはヴァローも駆け回ってみたら？」

そのヴァローの後ろに付いていきながら、アルムは悪戯っぽく笑っている。アルムの茶化するような発言を聞いたヴァローは、口角を吊り上げながら足を止めて振り返る。

「――なら、お前が駆け回ってみるか？」

ニヤリと笑ってみせると、大きく息を吸い込んだヴァロー。普段見せないような表情に身の危険を感じたアルムは、地面を蹴って咄嗟に右に跳んだ。

深く冷たい雪の中に自分の体が埋めれるのと、その脇をまるで鞭のように橙色の炎柱が撓るしなように抜けていくのは、ほぼ同時だった。通り抜けたその炎は、辺りの雪をほとんど融かして水へと変えていった。

「あ……危ないじゃないかっ！」

「当たり前だろ？　だって、狙ったんだから」

仕返しとばかりに、悪戯っぽく笑って返すヴァローに、アルムは頬を膨らませながら詰め寄っていく。

「な、何だよ……」

「何だよじゃないよ……。そっちがそうするなら、こっちだって反撃するよ」

後退りする内に、雪の壁に阻まれて逃げ道が無くなったヴァロー。そんな彼に一步ずつ歩み寄るアルムの顔は、一応笑ってはいるものの、どう見ても引き攣っていて、怒っているようにしか思えない。

今度はヴァローが身の危険を感じ、もう一度壁の方に振り返り、“かえんほうしゃ”で長い逃げ道を作った。そして、一目散に走って逃げていく。

「あっ、待てーっ！」

やや遅れて、アルムも後を追うように駆け出す。一見すると喧嘩してるように見えるが、これも二人にとっては戯れ合いじゃのようなもの。その様子を羨ましそうに見ていたティルは、堪らずアルムの後を追いつ始める。

こんな寒い中を三人が何をしているかと言うと、実はこの後で小さなイベントを催そうとしており、その為に外の状況を確認しているとか。

因みにその発案者は、クリスマスの時と同じくクイン。何をやるかは知らされておらず、女性陣が何か準備をしている事しかわかっていない。

「ところで、何をするんだろうね？」

「さあ？ クインさんにでも聞いてくればどうだ？」

追いかけてこも終わり、一旦立ち止まって休憩をしながら、二人はこの後の事について会話を交わす。傍らではティルがまだ物足りなげに雪の上に寝転がっている。そんな平和な空気の中で、突如二つの声が響き渡ってきた。

「わああああー！」

遠くから聞こえてくるように小さかった叫び声は徐々に大きくなっていく。空気を切り裂くような音が聞こえた為に、音源が何処かわかって三人が一斉に空を見上げると、上空から黄色い二つの何かが視界に入り、そのまま高く積もった雪の上に真っすぐ落下していった。

「あれは何だ!？」

「と、とにかく見に行ってみよう!」

訳もわからない事態に、三人は慌てて現状を確認しようとその落下地点へと駆け寄っていく。

「あたた……下が柔らかくて助かったよ。ポアロくん、大丈夫?」

「うん、大丈夫だよ! ルエノお兄ちゃんが咄嗟に下になってくれたから……」

こちらはその落下地点。黄色い体毛の二人の鼠のようなポケモンが互いの無事を確認し合っている。適度に柔らかい雪がクッションになってくれたおかげで、何とか助かったようである。

「それにしてもおかしいなあ……さっきまであの暑い砂漠にいたはずなのに……」

自分が今置かれている状況が上手く把握出来ていない様子のピカチュウ——ルエノ。ゆっくり起き上がると、足元の白い雪を掬い上げて感触を確かめ、不思議そうに首を傾げる。

一方で、目前に広がっている白銀の景色を見渡して、目を輝かせているピチューのポアロ。まだ無邪気なようで、ルエノと同じように雪を掬って舐めてみたりしている。

「どうなってるのかはまた後で考えるとして、とりあえずここが何処なのか調べないと……。ポアロくん、立って」

「うん、わかった。でも、どうするの……？」

「確か現在地を示してくれる“魔法”があっただけ……」

背中に背負っていたリュックを前に持ってきて開こうとした時、雪を掻き分ける音がして、その手を止める。音がする方に聞き耳を立てて待ち構えていると、突如目の前の壁が削られ、その掘り進んでいた正体がわかった。イーブイ、ガーディ、ジラーチの三人である。

「えっと、もしかしてあなたたちが今の……？」



「――なるほど。気がついたら何故か上空にいた、という訳ですね？」

「はい、砂漠にいたはずなんですけど……」

場所は変わって、アルムの家の中。事情を詳しく聞く為に、一旦来てもらう事にしたのである。

ルエノの話を纏めると、彼らは“サンザード”という砂漠の町にいたのだが、突然目の前が真っ暗になり、いつの間にか二人ともレインボービレッジの上空に放り出されていたという。

「へえー、それは興味深いわね。もちろん、あなた自体もだけど」

椅子におとなしく座っているルエノをまじまじと見つめるリアス。対するルエノは、とても困惑しているように見える。見知らぬ土地に飛ばされたのだから、当然と言えば当然である。尤も、視線を感じるというのも関係しているのだが。

「り、リアス姉さん……ルエノさんが困ってるから」

ルエノを救出すべく、アルムはリアスを頭でぐいぐいと押して引き離していく。その時のルエノは、露骨にこそ表れていないものの、何処か安心したようであった。

「ぼくはポアロって言うの。よろしくねっ！」

「ボクはティル。よろしくね〜！」

「私はシャトンって言うんでし。よろしくでし〜」

緊張して固まっているルエノに対して、ポアロはすっかりティルやシャトンと意気投合していた。まるでもう一つ太陽が現れたように、外は寒いと言うのに、家の中の雰囲気は明るく暖かいものとなっていた。遠くからその様子を見ているクインやラックも、自然と笑みが零れている。

「さてと、どうしたものかな。こんなの初めて聞いたからな……」

「とりあえず、今は成り行きに任せましょう。心配したってどうにかなる訳じゃないでしょうし……」

落ち着いた様子のサンダースとエーフィの夫婦二人は、ひっそりと影から見守る事にするらしい。落ち着いた、大人ならではの対応といったところである。

「そういえばクインさん、一体これから何をするつもりなんですか？」

ルエノ達の一件で今までのすっかり忘れていた事を思い出し、アルムは改めてクインに尋ねる。

「それはね、前にクリスマスをやった時に持って来た本に、別の行事が載ってたんだ。“節分”って言ってね、“鬼”を退治する儀式なんだ。それを今回やってみようと思ってね」

「へえーっ、“鬼”かぁ……」

二つ出て来た聞き覚えのない単語を復唱し、思考を巡らそうとした時、アルムの背後で何かが倒れる音がした。すぐに振り返ると、さっきまでおとなしく椅子に座っていたルエノが、すっと立ち上がっている。後ろに倒れている椅子を見る限り、今の音はルエノに間違いない。

「鬼ってもしかして……恐ろしい目つきをして、角みたいなのがある奴ですか……?」

「ええ、本にはそう書いてあるけど……」

「もしかしたら、僕、レインボービレッジ（ここ）に来る直前に見たかもしれません——」

節分の豆まき合戦ゝ鬼が出るか蛇が出るかゝ【後編】（前書き）

節分から早一ヶ月半。今さらなんだと言われるかもしれませんが、尻切れ蜻蛉で終わるのはどうかと思ひまして、思い切って投下しました。

※注意書きという名の言い逃れ（↑

ぶっ飛び方も中途半端な上、何とも都合良く終わらせましたが、それでも良いという方は読んでいって下さいなw その代わりと言つてはなんですが、ほんの少しだけ本編と関わってくるような内容の物を混ぜ込みました。

節分の豆まき合戦〜鬼が出るか蛇が出るか〜【後編】

“鬼を見た”このルエノのとてもない発言に、一同はその場で凍り付く。鬼など、空想の中の話だと思っているからである。

「ルエノお兄ちゃんの言ってる事は嘘じゃないよ！　ぼくも見たもん！」

この場の空気を読んでか、フォローするようにポアロは大声で叫ぶ。しかし、アルム達の訝しげな表情は変わらない。気づいたらこの村に来ていたという話だって、確たる証拠がある訳でもなく半信半疑だというのに、その上で存在しないはずの生物を見たと言うのだから、疑うのも当然である。

「ぼくは見たんだもん……ちゃんとこの目で見たもん……」

信じてもらえない事が残念なのか、俯いて小さな声で繰り返すポアロ。ルエノの為にも必死に訴えようとしているせいか、目には涙を溜めているようである。それを見兼ねたクインは、何かを思い立ったように場を離れた。

「まあ、何が何だっというじゃないかねえ。予定を変更して、素敵なお客さんも交えてイベントをしようじゃないか」

数分後、クインは両手で何か大量の丸い物体の入った籠を抱えながら戻ってきた。その物体からは、何やら香ばしい薫りが漂っている。

「ボクもさんせー！　一緒に遊ぼうよ！」

「えっ……ばくも参加していいの？」

「もちろんいいよ！ 遊ば遊ばっ！」

何かイベントをするという事で、元気良く動き回って明るい声を上げているティル。笑顔や発言からも天真爛漫さが表れている。

「ルエノさんも良かったらどうぞ？」

「そう……？ じゃ、お言葉に甘えて参加させてもらおうかな」

近くに歩み寄りながら、アルムも同じく笑顔で持ち掛ける。表情にははつきりとは表れてはいなかったものの、物悲しいそうにしていたルエノは、笑顔を浮かべつつその誘いを受け入れた。

「これで決まりだな。それよりクインさん、その抱えているのは一体……？」

「おや、ヴァローなら知ってるかと思ったんだけどねえ。これは正式名はオオズの実、通称は豆って言うんだ。これを鬼にぶつけて追いつかうのが節分らしいんだよ」

全員がもつと良く見えるように籠を下に降ろしながらクインは説明をする。その最中、ティルとシャトンは豆を一粒取って口に含んだ。一回、二回と噛み締めるその表情は、少なくとも美味しい物を食べてるものではなく、不思議そうな表情である。

「この実はね、辛い・渋い・甘い・酸っぱい・苦いのどの味にも該当しないんだ。それでも、栄養は豊富に含まれてるんだよ」

「へえー、そうなんだー」

クインの話を聞いているのかいないのか、ティルは一粒ずつ口に運んでいってはポリポリと食べ始める。

「あーっ！　だめだよ！　これはまだこれから使うんだから」

「ぶーっ、アルムのケチ」

食べるのを遮られて膨れっ面をするティルの羽衣も銜^{くわ}えて、アルムは一旦その場から離れる。これ以上食べられないようにと考えての行動であるが、ティルが不機嫌になったのは言うまでもない。

「それで……鬼にぶつけるってどういう事ですか？」

じと目で見てくるティルから目を逸らし、アルムは改めて節分に關する疑問を口に出す。

「何、簡単な事だよ。鬼役を決めて、その人にぶつければ良いだけの話なんだよ。早速鬼役を決めるくじ引きでもしようか」

説明も早々に、クインは籠の中からさつと何枚かの紙を取り出した。先に赤い印が付いているのが二枚あるらしく、その部分を隠して引き、赤いのを引き当てた人が鬼役という事にするらしい。

あまり人数が多いのも何なので、参加するのはアルム、ティル、ヴァロー、リアス、シャトン、ルエノ、ポアロの七人に絞られた。他の大人や年長者達は見守るだけにしようである。

「それじゃ、恨みっこ無しのために、皆で一斉に引こうよ」

他の全員もアルムの提案に賛同したところで、それぞれが自分のくじを選び、「せーの」の合図で一斉に引いた。先に赤い印があったのは——ルエノとヴァローであった。

「これで鬼役は決まったね。でも今さらだけど……僕たちは上手く豆を掴んで投げられないんだけど……」

その場の楽しそうな空気のせいで忘れていたが、アルムの言う通り、投げる方になったアルム、リアス、シャトンの三人は四足歩行であるので、豆をたくさん掴む“手”が無いのである。今さら浮き出た問題に全員が頭を悩ませる中、ルエノは思い立ったようにリュックから分厚い本を取り出した。

「ちょっと待って下さい……あ、ありました。【我が願うは力の分配。我の風を操る魔の力を暫しの間分割し、望む者に授け与えん——インティア・ソーセレリー】」

何か独り言のようにぼそぼそルエノが呟き終えた刹那、その周りの床に光の輪が出現し、その輪の中で一本ずつ光の筋が引かれていく。それがちょうど星の形になった時、ルエノの体が淡い光を放ち始め、数秒あった後に体から淡いピンク色の光の筋がアルム、リアス、シャトンまで延びていった。

「これは……何？ 良く分からないけど、すごく暖かくて力が漲ってくる……」

目の前で見えている不可思議な光景に全員が呆気にとられる中で、アルムが目を瞑って落ち着いた表情でいる。それは数秒経つと消え

ていったが、光を浴びた三人に何も異常は見られない。

「ねえ、今のは一体何でしか？」

「簡単に言うとな、僕たちの世界に存在する“魔法”の力を少しの間だけ使えるようになったんだよ。本当に、豆を飛ばすくらい微弱なものだけだね」

ルエノは本を静かに閉じながら、きょとんしているシャトンの質問に答える。それでも、ポアロ以外の全員が“魔法”の存在を知らない為、未だに理解出来ていないようである。

「とりあえず、豆をぶつきたいって心に念じれば、自然と風が飛ばしてくれるから」

「まあ……俺には良く分からないけど、とりあえず外に出るか」

ルエノの説明を簡単に聞いたところで、家の中でやるには狭いという事で、参加する一行は雪の積もる戸外へと出ていく。

外は都合よく晴れ間が差し込んでおり、徐々にではあるが空気が暖まり始めていた。積もっている雪も、泡雪である為か、表面はうつすらと融けている。

「さてと、俺達は今から逃げるから、早速始めるか」

ヴァローとルエノが別々の方に逃げ出してからしばらく待った後で、残りの全員も二手に分かれて一斉に駆け出す。

「ルエノお兄ちゃん。待てー！」

西方に逃げたルエノを追うのは、ポアロとシャトン。因みにポアロとティルはその手に豆の入った木の枡を持ち、シャトンやアルム、リアスは首からそれを下げている。

「待つでし待つでし」

お客だからと言って一切手加減する様子も無く、最初から全力で追いかけるシャトン。しかし、豆をぶつける事よりも、純粹に追いかけて楽しむように見える。

「おにはーそとー！」

ポアロは枡の中の豆を片手で掴み、威勢の良い声を上げて投げ付ける。複数の小さい粒は正確にルエノ目掛けて飛んでいき、半分以上が命中した。

「い、痛いなあ……。もう少し手加減して投げてよ……」

「鬼を払う為なんだから、お兄ちゃんも我慢してよね。とりゃーっ！」

少し涙目になってるルエノの事を心配する様子も無く、ポアロは

再び全力で豆をぶつけようとする。さらに、その後ろから追いかけるながらその様子を楽しそうに見ているシャトン。その二人を見たルエノは、本当の鬼はこの二人では無いのかと心の内に思いながら逃げ続けるのであった。

ルエノがポアロに半分弄ばれて^{もてあそ}んでいる一方で、東に逃げたヴァローはアルム、ティル、リアスの三人に追われていた。

「あははっ、待て待て〜！」

相変わらず陽気な感じで追いかけるティル。羽衣を使って飛んでいる為、雪によって移動を阻まれているようでもなく、自由に動き回っている。豆もぶつけるにはぶつけているが、ポアロとは違い、空から投下しているだけのようである。

「逃げる方が大変だって事をわかってるのか……」

溜め息を吐きながらも、満更でもなさそうなヴァロー。自身の炎技で目の前の雪を溶かしながら先を進んでいく。時々後ろを振り返ると、少し離れてアルム、さらに少し離れてリアスが付いてきている。

「追いかけるのはいいけど、豆をぶつけないといけないわね……」

「確か、心で念じれば風が飛ばしてくるって言ってたよね——」

ルエノの言葉を思い出し、アルムは心の中で祈りながら別の事をイメージしていた。走っている自分の周りで渦巻いている一陣の風が、自分の胸元にぶら下がっている柵内の豆を攫う^{さら}という事を。

すると、そのイメージ通りに風が吹いて豆が飛び出していき、ヴァローに命中した。ルエノの言う通り、一切手を使わずして、豆を飛ばす事に成功したのである。

「これ、すごい……。よし、もっと飛んでけっ！」

「やるわね、アルム。ヴァローくんには悪いけど、私も！」

一度成功した事もあったか、続けて豆を飛ばしていくアルム。リ阿斯もアルムが上手くやったのを受けて、頭の中でイメージをして豆を飛ばしてぶつける。

「やれやれ、クインさんもまた奇抜な行事^{もの}を紹介してくれたものだな……」

ひたすら逃げて豆を当てられ続けるヴァローは、彼なりにこの豆まきを楽しんでいるようである。

「おい、ちょっとは手加減しろよな……」

「手加減ってなに？ ……なんてね。テイル、せっかくだからもつと派手に撒いていいよ」

「分かった！ それそれ〜！」

それでもさすがに三人から同時に豆をぶつけられるのが痛いのか、

苦笑を浮かべているヴァロー。そんな思いを知った上で、アルムとティルは目一杯豆を当てようとする。

「お、お前らが鬼じゃないのか？」

「ヴァローが鬼なんだから、文句言わないでよね。ほら、逃げて逃げて」

満面の笑みを浮かべながら追いかけるアルムに、ヴァローは改めて些か恐怖感を抱きながら走り回るのであった。

その後、時には飛んでくる豆を口で受け止めて食べつつ、時には積もっている雪を食べて水分補給をしながら続けること十五分。全員の豆も尽きたところで、豆まきも終わりにして一箇所に再び集まる。

「これで終わりだね。追いかけても楽しかったね」

「楽しかったでし！ またいつかやりたいでしっ！」

「ぼくもまたやってみたいな」

ティルとシャトン、ポアロの三人は疲れている様子も無く、まだ遊び足りないのか、雪玉を作って遊んでいる。シャトンの枡にはまだ豆がたくさん残っており、交互に取り合っては一粒ずつ食べさせ合いっこをしている。

「逃げるこっちはそんなに楽しくも無かったけどな……」

「ポアロくんのおかげで僕も酷い目に遭ったし……」

口々に文句を言うのは、ヴァローとルエノ。溜め息も吐いてる辺り、相当走るのに疲れた様子である。

「あはは……年長者はご苦労様だね」

「私は本当にハズレを引かなくて良かったと思うわ……」

残りの二人はヴァローとルエノの疲弊しているのを見て、人事のような考えでいる。苦笑を浮かべているので、ある程度の同情はしているようではある。

「アルムは追う方だから楽だったよな——って、あれは何だ？」

どこかのどかな空気が続く中で、突如ヴァローが上を見上げる。一同は視線をヴァローと同じく上空に向けると、何か空から何かが降ってくる——と言うよりは、ゆっくり舞い降りてくるのが目に映った。

体は赤い体毛に覆われており、短い手のような物をばたつかせて落下している。そして地上に近づいてきた時に見えたその顔は——

「ルエノお兄ちゃん！ あれっ！」

「あっ、あれは……ここに来る前に見た——」

——頭部から突き出している二本の曲がり気味の角に、薄く上げ

た瞼とそこから覗くギラギラとした眼光。まさしく家にてルエノが言っていた鬼の顔面である。しかし、その顔には何処か違和感があった。体と顔のバランスが合っておらず、明らかに仮面のようなのである。

「あの一、あなたは？」

「やあやあ、久しぶりなのであーるっ」

アルムが近づきながら問い掛けると、聞き覚えのある口調でそのポケモンは応じる。ルエノとポアロ以外の五人が揃って誰なのか悩み始めた時、そのポケモンは思い切って仮面を外した。改めて見せた素顔と体は、まさしくデリバード。クリスマスの時に出会ったノエルである。

「の、ノエルさん！？ どうしてここに……？」

「いや、今回はこの二人に用があるのであーる。二人を迎えに来たのである」

ぴしっとルエノとポアロの方に振り向くノエル。その返答に二人はただただ意味も分からず立ち尽くしている。

「実は、ある人物ポケモンから、お主の望みルエノを叶えてやってくれと頼まれたのである。叶えられたであろう……？」

「えっ……！ は、はい」

アルム達には訳の分からない会話が続く中、ルエノだけは驚愕しながらも状況を把握しているようである。

「ねえ、ルエノお兄ちゃん。お兄ちゃんの望みって何なの？」

「それは……秘密かな。とりあえず、この世界に來た事と関係があるよ」

興味本位に下から顔を覗き込みながらポアロが聞いてくるので、ルエノは恥ずかしそうに目を逸らしてしまう。その頬も仄かに赤らんでおり、分かりやすい反応を示している。

「うむ、私のプレゼントの選択に狂いは無かったようであるな。それでは二人とも、そろそろ良いであるかな？」

腕組みをして誇らしげにしながら、ノエルは二人の方にさらに歩み寄る。二人も既に決心はついたようで、こくりと小さく頷く。しかし、その表情は決して明るいものではない。

「じゃあ突然だけど……ここで皆とはお別れだね。ありがとう、とても楽しかったよ」

「ぼくも楽しかった！　いつかもう一度皆と遊びたいな……」

ルエノ、ポアロの順で、それぞれが別れの言葉を告げる。それを受け、お別れの意味をしているのか、ティルは寂しそうにしている。ポアロの手を握って上下に大きく振る。

「僕もルエノさん達に会えて良かったです。また会えるかは分かりませんが……出来ればまたお会いしたいです」

「僕も短い時間とは言え、迎え入れてくれて嬉しかったよ。アルム

くん、元気でね」

最後にもう一度、アルムとルエノが握手を交わす。正確にはアルムの前足をルエノが握るという形になる。その握る力は優しいというよりは強いと言った方が正しく、まるで別れるのを惜しんでいるようである。数秒経った後でようやく手を離し、ルエノはポアロとともにノエルの元に行く。

「別れは済んだようであるな。それでは、あっちの世界に戻るであるよ。お主達には良く分からないかもしれないが、出来れば気にしないで欲しいである」

アルム達に語りかけるのを最後に、ノエル達の体は徐々に浮き上がっていく。その先には円状の異質な空間があり、中には黄土色の砂らしきものが見えている。一部だけ空間が振れているようで、何故か砂漠と繋がっているようである。

目の前で不思議な事が起こっていてアルム達は驚いているのに、一方のルエノ達は平気な様子で手を振っている。そうする内に三人の体は空間の穴の中に吸い込まれていき、穴とともに一瞬で消えてしまった。

「あれって、何だったんだろう……」

「さあな。あれも魔法だったりするんじゃないか？　ともあれ、これで一件落着だな」

ルエノ達が消えていった辺りを見続けているアルムとヴァロー。未だに納得は行かないようであるが、とりあえず家の方に引き返す事にする。

「ねー、アルム。何で二人が来たのか分からないけど、すごく楽しかったよね？」

「うん。分からない事だらけだったけど、少なくともルエノさん達が来たのは、きっと偶然なんかじゃないはずだよ。一緒に過ごした楽しい時間、絶対に忘れないでおこうね」

「もちろんだよっ！」

「分かったでし！」

どうして、そしてどうやってこの世界に来たのか。魔法とは何なのか。何故ノエルが関係していて、帰るのもどうなっているのか。疑問に感じる事はたくさんあったが、アルム達にはどうでもよかった。今はとにかく、帰っているいろいろ報告したい事があったから。本当に短い時間だったけど、このとても貴重な出逢いについて家族と話す為に、五人は走り出すのであった。

節分の豆まき合戦ゝ鬼が出るか蛇が出るかゝ【後編】（後書き）

さて、短編としては二つ目でしたが、いかがでしたでしょうか。強引にセルフコラボさせて頂きましたが、まあその辺は僕の作品を読んで下さってる方なら笑って流して下さるかと思ひましてw

一応忠告しておきますと、本編の方でコラボする事はありませんので。そうなる、ただでさえ破綻している物語が、さらに面倒な事になりますからね↑

何故か前編の倍の長さになってしまった後編ですが、少しでも楽しんで頂けたなら幸いです。これからもちよこちよ短編を投下しこうかとも思いますので、その際は軽い気持ちで覗いていつて下さいね。

長くなりましたが、今回はこの辺で。ではまたいつか会いましょう
ゝ↑

一周年企画について

えー、3月28日を持ちまして、僕がなろうに来て一周年を迎える事になります。これも偏に読者の皆さんや、他の作者の方の応援などがあつたからです。本当に感謝致します。

さて、お堅い話もここまでにして。一周年という事で、他の作者さん達の真似をして、何か企画をしようと思います。

レン「人気投票とか……？」

ミナト「それぞれのキャラに合った声優を考えてもらうとか……？」

アルム「参加キャラを募集するようなイベントを開催して、コラボみたいな事をするとか？」

ルエノ「あとは……思いつきません」↑

うん、他の皆さんがやってる事は、だいたいこのくらいだね……。もちろん上記のどれも良いのですが、今回はちょっと趣向を変えまして――

リクト「ネタバレ会議とでも行くか？w」

お前、一回その減らず口を塞いでなさい↑

えー、気を取り直しまして。今回僕が考えたのはですね、題して“ネタを募集して短編を作ろう！”というものです。

ガート「ネーミングセンス悪っ」

おのれは三味線の材料にされたいのかね？↑ ……んまあ、ネーミングセンスの悪さはとりあえず置いときまして……。早い話が、皆さんからリクエストを頂いて、そのリクエストの中から僕が良いと思ったものを選んで短編を書こうというものです。

アルム「他の作者さんのキャラを借りてコラボするのはまた違う、参加型の企画って事かな？」

うん、そういう事。まず、そうしたところで僕がコラボキャラを扱える自信が無いというのがありましてw

ケンゴ「しかし、よくもまあくだらないアイデアばかり浮かぶ事で……」

うるさいやいっ！　これが頭使って何とか捻り出した物なんだいっ！　何か文句あるならかかってきな！

レン「……何だか暴走を始めた作者はほっときまして——」

ルエノ「参加方法について紹介させて頂きます」

- ・期限は本日3月20日から3月27日までの一週間。

- ・期間内であれば、何度送っても良い。寧ろ多い方が大歓迎。

- ・ただし、アイデアを送る手段はメッセージか、僕のメルアドを知ってる方はそちらへのメールのみです。感想では受け付けませんので、悪しからず。

ルエノ「こんなところみたいですネ」

ヴァロー「でも……何か大雑把過ぎないか？」

うん。だから、今から細かい説明をしようかと。

リクエストの内容については、可能な限りとはなりますが、何でもありとさせて頂きます。例えば、「アルムとルエノが大食い対決をしたらどうなるのか？」みたいな、別々の作品のキャラをコラボさせるのもあります。しかし、あんまり無理な物は却下とさせて頂きますので、ご了承下さい。

出来れば、細かい設定なども考えて頂けると書きやすくて助かります。上記ので例を挙げるならば、“饅頭の”大食い対決といった感じです。

ここまでを、“キャラへのリクエスト部門”の説明とさせて頂きます。

では続いての説明を。“キャラへの（以下略）”とは別にもう一つ設けたのが、“作者へのリクエスト部門”です。一見どちらも意味的には変わらなさそうですが、こちらに関しては、短編の内容そのものよりも文章についてのリクエストを受け付けます。

例えば、「第○話のバトルシーンを、効果音だらけにして書き直したらどうなるのか？」といった具合です。「あなたが嫌いな書き方で書いてみて下さい」なんてのもありますよ↑↑

二つ部門を設けましたが、別に何か特別な事をする訳ではありません。ただ、わかりやすく二つに分けたに過ぎません。あと、この企画について分からない事などについては、こちらの感想欄に質問して下さって構いません。

ティル「説明長〜い。もう疲れちゃったよ〜」

“これ”に関してはこれで最後だから待って（汗）

なお、内容自体がキャラ崩壊になってるような事であれ何であれ、快く受け入れて下さいね。本編とこの企画とは一切別物だと考えて下さい。そして、リクエストが多い場合は僕が勝手に選ばせて頂きますので、その辺もご了承下さい。

シャトン「これで終わったでしか？」

実はこの企画、まだ終わりではありません。もしリクエストが集まらなかった場合の対策としまして、キャラの人気投票も平行してやるかと思います。

レン「何か気になるなあ……どんなの？」

あ、言っとくけど、君達じゃないからね。

アリサ「えっ！ それ、どういう事よ！」

どういう事もこういう事も、改めて見返してみると、話数だけたくさんあるくせに、ポケトラのオリジナルキャラって案外少なかったりするんですね。もちろん手持ちのポケモンを含めれば別ですが、単に人間だけならウォッチャーの方とどっこいどっこいというねw

ミナト「そういう言い方をするという事は、俺達も自動的に省かれる訳だ」

ポアロ「ぼくたちも……だよな？」

そう。つまりは、エトワール・フィランテにおけるキャラの人気投票を行うって訳です。キャラの数を数えてみたら、一応20以上いたのでw

アルム「それって、リーフタウンで会ったお猿さん軍団（↑）や、ブルーメビレッジの祭りでパフォーマンスをやった人達も含めて？」

もちろん全員含めて。それで、投票についてですが、一人4票までとさせて頂きます。そして出来れば、投票に順位を付けて頂きたいです。それにより、1位は4点、2位は3点、3位は2点、4位は1点ずつ入れるようにしたいと思います。さらに出来れば、選んだ理由なんかも明記して下さると嬉しいです。因みに、期限はリクエスト短編と同じく、27日までとなっています。

レイル「面倒な事をするのですね。さしずめ、投票が少なかった場合に票数をごまかす為とかではありませんか？」

うっ……なかなか鋭い……。という訳でして（↑）、皆様には大変お手数をおかけしますが、このようにして投票を行いたいと思います。もちろん、この企画に参加するに際して、リクエスト短編の人気投票のどちらか片方だけでも構いません。両方参加して下さった方には、もれなく懐くと思います↑↑

エトワール以外の人気投票をして欲しいなんて意見がもしありまし

たら、是非におっしゃって下さい。その際は検討して新たに追加するかもしれませんが。

エトワールのキャラについてですが、今さらキャラ紹介を作っても間に合わないので、出来れば本編の方を見て下さい。

長々と続いたお知らせも、この辺で終わりにしたいと思います。いろいろと面倒な企画内容ばかりかもしれませんが、お付き合い頂けると幸いです。

レン「それでは、皆さんの参加をお待ちしていますね」

ミナト「気が向いた時でいいから、気軽に参加してくれよな」

アルム「何とか楽しいものにするように、僕たちも精一杯努力します」

ルエノ「重ね重ねご迷惑をかけるかもしれませんが、よろしく願います」

作者の僕からも今一度。皆さんからの応募をお待ちしております。

アルム「もし何も来なかったら、どうするつもり？」

……一応自分で別の短編を考えてあるから大丈夫。

レン「用意周到と言うか何と言うか（汗）」

これであんなかったら本当に赤っ恥だからね。それくらいの覚悟はしてるよw

エトワールキャラの人気投票結果発表！

人気投票に参加して下さいった皆さん、この度は本当にありがとうございましたっ！
ございましたっ！ 何とか発表出来るまでには集まりましたw

アルム「裏を返せば、そんなに集まらなかったってこと？」

返さなくてもそうなるねw 前置きが長くても何なので、早速結果発表の方に参加したいと思います。一応、名前の後ろに種族名を付けておきます。理由については、頂いた物から抜粋してこうと思います。

まずは、同率7位が二人います。リアス【シャワーズ】とクイン【ニドクイン】です。

リアス「あら、私に入れてくれた人がいるのね？ 嬉しいわ！」

クイン「それで……アタシもかい？ それ程関わってなかったけど、嬉しい限りだねえ」

はい、まずリアスが選ばれた理由についてですが、『登場は少ないものの、いたずら好きで活発そうな性格は惹かれるものがあります』といった物を頂きました。

僕としてはとても意外でしたねw 本当はリアスにはもっといろいろやってもらう予定だったのですが、ルーンに全て譲った次第です↑

続いてはクイン。『料理もうまいし、しっかり者で、戦いになって

も頼れる』といった理由がありました。

旅立ったばかりのアルム達に早速難関が降り懸かるのはどうかと思
いまして考えたクインですが、何か好評を頂いてるようで良かった
と思ってますw 因みに余談ですが、他の方の作品を見る限り、ど
うやら口調が映画のゾロアークと似ているようなのですが、僕は映
画を見てないのです。……はい、どうでも良いですねw

では続きまして、5位の発表に参ります。つまりは、また同率です。
そのキャラはと言いますと——ルーン【ブラッキー】とレイル【ポ
リゴン】です。

ルーン「オレが選ばれるとはな……。投票してくれた人には感謝す
るよ」

レイル「5位という事は、先のお二方より良い票を頂いたという事。
私を選んで下さったという事は、私に興味を持って頂けたという事
ですね。素直に受け取らせて頂きます」↑

……何か訳の分からないのが一人いるのは置いといて、理由につい
て行きますw

まずはルーンですが、『面倒見のよさと察しのいいところがよかつ
たです』『アルムの兄として、アルムのことを大事にしていること
がよく伝わりました』このような意見がありました。

僕は基本兄弟の微笑ましい姿なんてのを書きたい性なので、自然と
ルーンのキャラが生まれました。個人的にも気に入ってるキャラの
一人ですね。実はフランス語で“月”は“リュンヌ”だったという

のは後で気づいた話です↑

続いてレイル。そのままコピペしたので長くなりますが、『機械的なキャラクターというのは良くあれど、レイルには「もしかするとこいつ感情豊かなんじゃないか」と思わせられる時があつて（もちろん良い意味で）、冷たい態度にも関わらず妙な暖かさを感じるんですよ』『ズバリと言い切る彼らしさも素敵です』このようなご意見を頂きました。

個人的な意見になりますが、ここに票が入るのは想定内ですw エトワール・フィランテにおけるティルと同じくらいの謎を秘めている（と、僕は思っている）キャラなので、僕も特別な愛着があります。アルム達の中ではちよつと異質なキャラですが、その辺が僕としてはある意味見所かな？と思ひまして。

それではどんどん参りましょう！ 続いても同率3位が二人います。ここまで来ると、何か面白いですねw

それでは、その3位に選ばれた二人を発表します。それは――ヴァロー【ガーディ】とシャトン【エネコ】です！

ヴァロー「おっ……やっぱりこういうのに選ばれると嬉しいな。入ってくれたみんな、ありがとうな」

シャトン「にやはは〜。3でし3でし！ ありがとうでし〜！」

これも……ある意味意外であり、想定内でもある結果となりましたw
まずヴァローが選ばれた理由には、『責任感があり、仲間思いで、

バトルも強く……。男らしくてカッコいいところが大好きです!』
『アルム達ご一行のお兄さんの存在な所が好きですw』『幼なじみ
ということアルムともいいコンビです♪』などを頂きました。

このヴァローも、先に言ったルーンのような考えの元に生まれたキ
ャラなので、親友でありながら兄貴分のような感じになったんです。
しっかり皆さんにその印象を抱いて頂けているようで良かったです
w 彼にはまだまだ活躍してもらうつもりですっ。

シャトンの方に寄せられたものには、『アルム君達をブルーメビレ
ッジに連れてきたシーンなどからは元気な様子が伝わってきて、好
きです』『性格もエネコというキャラにあった自由奔放で天真爛漫
なところがいいですw』といったものがありました。

とことんまでに明るさを貫いたキャラ二号(↑)となった彼女がこ
の順位になり、僕としても嬉しい限りですw 一度言った事もある
かもしれませんが、最初はただの村ポケモンとしか考えてなかった
のです。しかし、それではつまらないだろうという事でこうなりま
した。

辛い過去を抱えていながら明るく振る舞ってのが良いという意見も
頂きました。これにはそれなりの理由があるのですが、話が完結し
た頃に纏めて説明させて頂きたいと思います。あとは、特徴的な口
調を気に入って下さる方もいらっしゃるので、僕としても嬉しいで
すw

さあ、いよいよ第1位の発表です。——はい、今回の人気投票、全
て同率が二人ずついる形になったのです。すごい偶然ですねw

ここまで来れば既に分かっていると思いますが、栄えある1位に選ばれたのは――アルム【イーブイ】とティル【ジラーチ】です！僕としては少々意外でしたねw てっきりアルムがティルに――果てはシャトンにも負けるのではないかと思ってましたからw

アルム「それを言うかな……？ とにかく、投票して下さったみなさん、ありがとうございますっ！」

ティル「ありがとっ！ わーい！ 嬉しいなあ〜♪」

よくよく見ると、今までに挙げた同率コンビの中では一番ピッタリな組み合わせですねw まあ、くだらない事はさておき、理由の方をば。

アルムの方には、

『素直で家族のためにも早く進化したいって思っている気持ち。守られるのではなく、守りたいという想いに惹かれました』

『臆病なアルム、でも、ティルと出逢ってから少しずつ成長しているのが伺えます』

『まだ年齢的には幼いだろうに、頑張って気を張って、大人な態度を崩さないとしてるところに愛着が湧きますね』

『優しく、仲間思いな性格が大好きです』

『怒りや不満の感情もきちんとしてくれるので、感情移入しやすいキャラです』

とのご意見を頂きました。

ティルの方に寄せて頂いた中には、

『なんと言ってもその無邪気さに心打たれました』

『まだ謎だらけでミステリアスなのにそれを全く感じさせないあのキャラ性。無邪気な子供っぽいテイルがかわいくて大好きですw』

『伸び伸びとして愛くるしいキャラクターなので大好きです』

『悪戯好きなどところも可愛らしいです』

『彼は常に無邪気な様子なので、読んでいるこちらは保護者になった気分になります（笑）』

こういったものがありました。

アルムに関しては、最初はもう少し不安定で謎の多い感じのキャラにしたかったのですが、いつの間にかあのようになってました。今ではそれで良かったと思ってますけどw

もしかしたら本当の主人公なのではないかというくらい力を込めて書いているテイルですが、皆さん揃って“無邪気”という印象を抱いて頂けるようで良かったです。彼にはまだまだ謎が秘められていますが、後々明かしていこうと思います。因みに、重要ポケモンですねw

さて、閉めの言葉になりますが、投票して下さった皆さん、丁寧に理由を書いて下さり、本当にありがとうございます！それとともに、キャラが上手い事伝わってるんだなあと思い、さらに嬉しい限りですw

僕としては（話数という意味ではなく）まだ20%くらいしか話が進んでないのではないかと思ってます。つまりはまだまだこれから先が続いていくので、出来れば最後までお付き合い下さいっ。

さて、残る企画はリクエスト短編となりましたが、こちらは少々時間が掛かるので、しばらくお待ち下さい。どうもすみません（汗）

アルム「あの……話を戻すみたいだけど、詳しく開票ってしないの？」

しないよ、ここではね↑

それでは、引き続き短編の方も楽しみにして下さいと幸いですw

【リクエスト短編】 もしも、エトワールのどれか任意の場面を全部体言止めに

まず一発目が、作者へのリクエスト部門と寄せて頂いたこちらです W

抜粋したのは、【第十二話 花の咲き乱れる村へく強引な猫さんの家く】の冒頭部分ーシャトンがテイルとその他（↑）をブルーメビレッジへと誘う場面ですね。

ところどころ日本語じゃない部分がありますーと言うか点在しますが、それもまたこの短編ならではの言う事でどうぞ W W

【リクエスト短編】

もしも、エトワールのどれか任意の場面を全部体言止めに

「にゃは、こっちでしゅ！」

「二人とも待ってよ」

軽快なリズムを刻みながら花畑を走り抜けていくシャトンを追いかけるアルム達。それほど速く走っている訳ではないものの、一向にペースが乱れないので、出来るのは追尾。

一方で、シャトンの尻尾に興味津々のティルが追いかけて回しているのは、やはり尻尾。飛んでいるので、その様子などはない疲弊の二文字。

「ねえ、ヴァロー。シャトンが向かっている町って何処だろう？」

「さあな。どうせ急ぐ訳でもないんだし、別に寄り道もいいんじゃないかねえか？」

何を呑気な事を——と言いたかったが、ティルがああなってはどうしようもないのは分かっていたし、元々はこの世界を見て回るのが目的だった事を思い出し、ヴァローの意見に同意。

そんなやり取りが交わされている間に、徐々に変化し始める道。開けた平野からは一変、でこぼこした丘陵地帯。今まで地上を覆い尽くしていた花たちも、まるで道を譲るかのように脇に避け、作り出しているのはまさしく一本の長い曲がりくねった道。

道の続く先に目を遣ると見えた、多くの家が軒を連ねている集落。

いや、家と言うとそれこそ語弊。

一面に広がる色とりどりの花畑の上に立ち並ぶ、草や木で出来た、家にもテントにも見える建物。リーブタウンとは違い、自然と一体となっているのがこの町の特徴。しかし、町と言うには些か小さいようにも見える狭さ。

そんな町の入口らしき木製の門の前まで来た時、立ち止まったシヤトン。どうやら二人を待っていてくれる様子。

「ここが私の住んでいる町、ブルーメビレッジでし！」

「ビレッジって……町じゃなくて村じゃない？」

澆刺はっらつとした紹介に対し、アルムは一応入れるつつこみ。ふと視線を逸らしたところにあるのは、“ブルーメビレッジ 花の咲き乱れる村”と書かれている看板。

「んー、町は町でし。それじゃ、ついて来るでし！」

間違いだとは微塵も思っていないその発言には、さすがに何も言えなかった二人。とりあえずは黙って行進。シャトンの後をひたすら行進。

【リクエスト短編】 アルムとティルのお遊戯

どんよりと分厚く黒い雲が空を覆い尽くし、とても好ましいとは言えない天候。いつもなら暖かい風が吹き抜けるものの、この日に限っては湿っぽさを纏った不快な生暖かい風が吹くのみ。いかにも悪天候であり、外に出るには些か勇気が要るといったところである。

「ねーねー、アルムー。お外で遊ぼうよ！」

レインボービレッジのとある一軒の家の中。外と同じくじめじめした空気が漂う一室にて、ひたすら遊びに誘おうとするジラーチーティルの姿があった。天気などお構いなしに元気のようなのである。

「えー……今日は天気が悪いから、また明日にでも遊ぼうよ。ね？」

やんわりと誘いを断るのは、イーブイのアルム。余程この蒸し暑さが堪^{こた}えているのか、床に寝そべってだるそうにしている。こんな時に限って体毛というのは厄介であり、何とか涼を取る為に必死に尻尾で風を送ろうとしているが、寧ろ逆効果だった。

「むーっ。ボクは今遊びたいんだもん！　ねー、良いでしょ？」

「ダメだったらダメ。遊びたいんなら、一人で遊んできてよ。僕はちよっとこの暑さにお手上げ……」

二度目のお願いにして、ティルはアルムの尻尾をズルズルと引きずって外に行こうと促す。しかし、相変わらず乗り気でないアルムは、何とか足で踏ん張って抵抗をしている。

「もうっ、アルムのケチっ！」

しばらく引っ張ってみるものの、全く動じないアルムに頬を膨らませて怒ると、ティルはアルムの部屋を出てしまった。あまりに呆気ない事に一瞬驚くが、ようやくゆっくり出来るという事もあり、アルムはそのまま静かに瞼を降ろした。

空気はじめじめして嫌だけど、このまま眠ってしまえば楽でいいや——そう思っただけで眠りに落ちようとした時だった。頭上から急に冷たい水が降ってきて、思わず飛び起きる。

「これでもう暑くないでしょ？ それじゃあ、遊びに行こっ！」

目を開けた先にいたのは、満面の笑みを湛えているティルだった。どうやら、その手に水を抱えて運んできて、アルムの頭の上から掛けられたらしい。

「もうっ、今日は遊ばないったら！ 一人で遊んでくれば良いじゃないかっ！」

眠りを妨げられた事もあったか、アルムはやや怒鳴り気味に叫んで拒む。体がずぶ濡れになったせいで、余計に蒸し暑さを感じてますます苛立っているようである。

「うーっ……アルムのいじわる！ いじわるっ！ もう、ボク一人で遊んでくるから良いもん！」

遂にティルも我慢の限界に達したのか、一頻り騒ぐと、ふらっと外へと飛んで出てしまった。一方のアルムは、それを見送るもせず、憤慨した表情のまま近くの本を開いて読み始めた。

「うーん。やっぱり本を読んできると落ち着くから良いなあ……」

一悶着あってから数十分後、読み疲れた目を休めるべく、一旦本を閉じて体を起こすアルム。辺りをキョロキョロ見渡すが、やはりティルの姿は無かった。

（まあ、またすぐに戻ってくるよね……）

少し心配してはみるが、アルムはすぐに落ち着いて本を読もうとページを捲っていく。しかし、そんな最中、ふと何か複数の物が激しく地面を打ち付けるような雑音が聞こえ、下げかけた頭をもたげてみた。

すると、窓の外では大きな雨粒が強く、大量に降りしきっているのが目に入った。まさしく、バケツに入った水をひっくり返したかのような雨は、村全体に渡って降っているようである。

「ティル、大丈夫かな……。いや、ティルならたぶん楽しく遊んでいるよね……」

独り言のようにぶつぶつ呟きながら部屋をウロウロするアルムだが、心配しないという結構を出すと、何事も無いかのように再び座り込む。しかし、耳を閉じていても聞こえてくる程の激しい雨音に、少しずつ不安が募り始める。

（もしかしたら、この雨が怖くて泣いてるかもしれない……。やっぱり――）

意を決したように立ち上がると、真っ直ぐ家の玄関へと走って
いて、勢い良く扉を開ける。外に出た瞬間、体中に次から次へと雨
粒が当たり、痛みこそ感じないものの、あっという間に濡れてしま
った。

「テイルー！ どこにいるのーっ！」

声を振り絞って出来るだけ大声で叫んでみるが、それを邪魔する
かの如く降り続ける雨の音に掻き消されてしまう。せいぜい、呼ぶ
声がとぎれとぎれに聞こえるくらいである。

「もう、何でこんな時に外に出て遊ぼうってするのかな……」

ふと吐く溜め息が雨の中に溶け込んでいくのを感じつつ、今度は
家の周りを捜そうと歩き出す。足元は既にほとんどが水溜まりと化
しており、踏み締める度にしゃしゃと水飛沫を上げている。

半周を回った頃にはもう濡れる事には慣れてきた為、気にする事
なく歩き続けていると、雨音に混じって、水が跳ねるような音が微
かに聞こえ始める。自分の出しているのとは違う、強く跳ねる音。
急いで歩を進めて音源の方に向かってみると、そこには水溜まりで
跳ねて遊んでいるテイルの姿があった。

「あー、アルムだ！ やっぱりアルムも遊びたくなっただねー！」

人の気も知らないで——そう思いつつも、アルムは自然と笑顔が
零れていった。もう怒る気などさらさら無くなり、静かにテイルに
歩み寄る。

「ね？ せっかくだから、アルムも遊ぼう！ 水で遊ぶの楽しいよ

！
」

無邪気な笑顔を向けられては、もう拒否する事もできなかった。微笑みながら頷いて了承の意を示すと、ティルはより嬉しそうにはしゃぎ始めた。

「それっ！ もっとずぶ濡れになっちゃえっ！」

先に仕掛けるのは、ティルの方だった。地面に貯まっている水を掬い上げ、アルムに向かって思い切り掛ける。

「あっ、やったな〜！ お返しだよ！」

大量に滴る雫を振り払い、アルムは前足で強く水を跳ね上げた。今度はティルが水をたくさん被る事になる。

「だったら、お返しのお返しだよ〜！」

水の掛け合いは徐々にヒートアップしていき、先程までの蒸し暑さなどまるっきり感じない程にアルムは楽しんでた。久しぶりに目一杯体を動かして遊んでいるように窺える。

それから後も、掛け合いが終わると、水溜まりに飛び込んだりなどして、二人はまた別の遊びに没頭し始めた。雨に対する不快感など、微塵も感じさせる様子も無い。寧ろ、雨の恩恵を体いっぱいを受けているようである。

水という自然の楽器を巧みに使いつつ奏でられる二人の旋律は、激しい雨の中でも掻き消される事なく、長い間鳴り響く事となる。弾んだり弾けながら聞こえるその楽しそうな流れの中には、二人の

無邪気な心が投影されているようでもあるのだった――。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7003p/>

はぐれ星とはぐれ伝道士の記録～おまけの短編・設定集～

2011年11月12日14時19分発行